生徒指導に生かす

「心の天気」で心の変化を「見える化」しサインを見逃さず個に応じた生徒指導を

岐阜聖徳学園大学教授 玉置 崇

教科学習で個別最適化を行えば、それだけですべてがうまくいくわけではない。生徒指導も重要である。1人1台を生徒指導に生かす方法を探るため、それを可能にするシステムの開発に関わった岐阜聖徳学園大学の玉置崇教授に話を聞いた。

声かけのきっかけになる

個別最適化学習を進めるには、まずは個々の子どもを知らなくては始まらないと思うのです。いくら個別最適化で子どもの習熟度に合わせた問題に取り組ませても、その子どもの気持ちが学習に向いていなければ、効果は期待できないでしょう。やはり、一人一人の心の状態を捉え、必要に応じて心理的な支援や生徒指導をしながら、学習の助言をしていく必要があります。

そんなときに役立つのが「心の天気」システムです。操作はとても簡単で、子どもたちはタブレットで、「晴」「曇」「雨」「雷」の4つの天気の中から、そのときの気持ちに最も近いマークを選んでタッチする、たったこれだけです。非常にシンプルですが、これにより子どもたち一人一人の気持ちが「見える化」され、毎日続けることで教員は子どもの心の変化を見取ることができます。子どもからのサインに気づきやすくなり、声かけのきっかけになるのです。つまり、「心の天気」システムはICTを使った子どもとのコミュニケーション・ツールの一つだと考えていただくといいと思います。

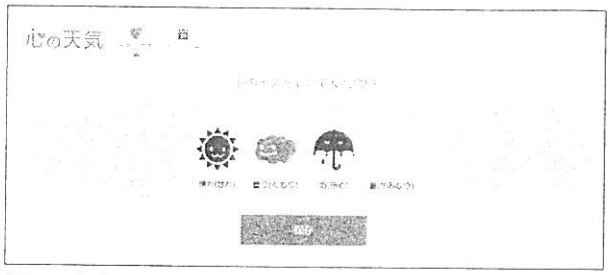
「心の天気」は株式会社EDUCOM（エデュコム）が開発したシステムですが、実は私が出したアイディアが基になっています。「心の天気」の発想は、最初はデジタルではなかったのです。私は平成15年からWebで仕事日記を書いており、毎日、一日を振り返ることは大切だと感じていました。そこで、私が最初に校長として着任した小牧市立光ヶ丘中学校で、子どもたちにも日々を振り返らせたいと考え、「3年日記」という3年間書き込める分厚い日記帳を作りました。ただ、毎日文章を書くのは大変だろうと思い、「晴」「曇」「雨」などのマークを入れ、その日の気分で○をつけるようにしておきました。これが「心の天気」の発想につながりました。3年日記を作成したのは平成18年度ですが、日記帳を印刷したところで異動になり、実践に立ち会うことはできませんでした。そのため、

玉置 崇（たまおき・たかし）
1956年、愛知県生まれ。公立小中学校教諭、国立大学附属中学校教官、中学校教頭・校長、県教委主査、教育事務所長などを経て、2015年4月より現職。教員養成に精力的に取り組み、文部科学省「統合型校務支援システム導入実証研究事業」の委員長も務める。

いつかどこかで「心の天気」を使った実践をしたいと思っていたのです。

稼働率100%が可能に

これから全国の小中学校はコンピュータ1人1台配備に向けて進んでいくわけです。私は行政にいた経験がありますから、行政にとっては導入した機材がどの程度使われているのかが非常に重要だということを理解しています。その際に重視するのは稼働率です。せっかく税金を使って機材を買うわけですから、稼働率が100%で、かつ教育にプラスになることが求められます。



「心の天気」の入力画面。

そのためには、タブレットを毎日授業で使うべきなのでしょうが、これまでの経験から現実問題としてなかなか難しいことだと感じています。となると、稼働率100%を実現するには、授業だけではなく日常生活でも使う必要があります。それにはどうしたらいいのだろうと考えたときに、3年日記の「心の天気」を思い出したのです。「心の天気」をシステム化し、毎日子どもがタブレットで「晴」や「曇」マークをタッチすれば、稼働率100%の実現も可能となります。「このシステムをぜひ開発してください」と、以前から付き合いのあったEDUCOMの関係者にお願いし、現在に至っています。昨年度は大阪市内の小中学校をはじめ、全国の複数の小中学校を実証校とし、実際に使ってもらいました。その結果を踏まえ、今年度から大阪市内の全小中学校に導入されると聞いています。

毎朝「心の天気」を入力する

実証校での「心の天気」システムの使い方としては、朝、子どもが登校したら、教室でタブレットを使って、「晴」「曇」「雨」「雷」の中から今の気持ちに一番近いマークを選んでタッチする、というのが一般的です。担任には、それぞれの子どもがどのマークをタッチしたかがリアルタイムでわかります。さらに、クラスの一覧表ができますので、クラスの子どもたち全員の日々の心の変化を見ることもできます。

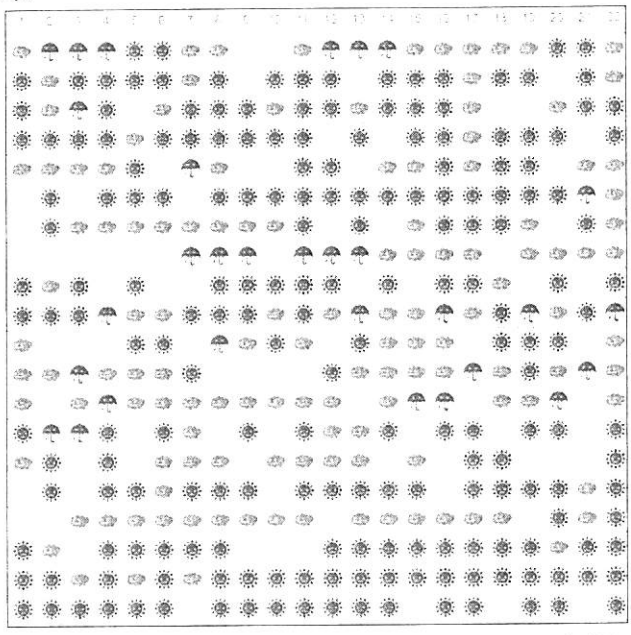
実証校の一つである沖縄県の中学校では、タブレットがグループに1台しかありませんでした。朝、タッチするときに誰が何を選んだのかが、グループのメンバーにわかってしまうので、私は心配していました。しかし、実際は、それがプラスに作用しているというのです。子どもは朝、「今日、俺は『雷』だよ」などと言いながら、入力するそうです。そうすると、グループのメンバーは何があったのかを聞きたくなり、話しかけます。そこでコミュニケーションが生まれているわけです。

また、東京都のある小学校では、特別支援教育に限定して活用してもらっています。その学校には通級があり、支援を必要とする子どものことで、通級を担当する教員とクラス担任が打ち合わせをしたくても、時間がとれなかったそうです。そんなとき、通級の教員が「心の天気」を朝、確認できると非常に便利だと言っていました。

「心の天気」は一日の中で変更することも

できます。ある学級では「心の天気」を学級づくりに生かしているそうです。朝、クラス全員が入力し、「雨」が多いときは担任がクラスの一覧表を拡大して公開します。担任はそれを見ながら、「今日は『雨』が多いね。帰りまでに全部『晴』にしよう」と子どもたちに伝えます。その後、帰りの会で再度マークをタッチさせ、「晴」が増えていたらみんなで喜び合うそうです。

このほかに、大学の私のゼミの学生にも毎日「心の天気」に入力してもらっています。これにより、私は久々に学級担任のような気持ちになって、気になる学生に対してはメッセージを送ったり、話しかけたりしています。興味深いのは、平常心の状態が「晴」の学生もいれば、「曇」の学生もいることです。心の捉え方は人それぞれで、「曇」だから落ち込んでいるわけではなく、普通という意味で「曇」マークをタッチし、特別にいいことがあると「晴」にしているわけです。そのようなことが変化を見ていくとわかってきます。ある学生は「『心の天気』は心の避難場所」とゼミのホームページの記事に書いてくれました。一日を振り返り、自分の「心の天気」がどのマークか考えることには癒やし効果もあるのです。



「心の天気」を毎日記録していくと、一覧表から心の変化を把握することができる。縦軸は児童生徒、横軸は日付。

厳密さを求めないことが重要

子どもは「心の天気」についてどう思っているのでしょう。子どもたちからは「『晴』のマークがかわいい」「好きな記号を選んでいる」「土日の分も入力したい」などの声が聞かれたそうです。反対に、「何のためにやるのかわからない」と感じている子どももいるようですが、それも認めてやり、会話につなげてほしいと思います。

学校関係者に注意していただきたいのは、厳密さを求めすぎないことです。操作は簡単で小学校1年生でも入力できますが、教員から「なぜ今日は『曇』なの？」と尋ねられても、答えられない子どもがいます。「この記号が好きだから」という理由で選ぶ子どももいるでしょう。子どもがどんな記号を選んでもいいのです。大事なのは、継続してその子どもの心の変化を見ていくことだからです。中には「今日は天気を選びたくない」という子どももいるかもしれません。それに対して「なぜ言われた通りにしないのだ」などと怒るのではなく、それも認めてやり、「何かあったのかな？」と言葉をかけることが重要なのです。

ある学校では「『曇』でもなくて『雨』でもない」と、子どもが担任に言いに来たそうです。そういうとき、教員は「このシステムは不十分である、記号を増やす必要がある」などと考えがちです。しかし、先ほども申し上げましたが、これはコミュニケーション・ツールです。わざわざ自分の気持ちを言いに来た子どもに対して「『曇』でも『雨』でもないと、自分の気持ちを表現できるのはいいことだね」と褒めてやっ

てほしいと思います。

校務支援システムと連動させる

「心の天気」システムはWeb環境があれば使えます。実証校の中には、このシステムだけを使っている学校と、校務支援システムと連動させている学校があるのですが、前者よりも後者のほうが、より活用してもらえることがわかりました。前者の場合、教員は忙しいため、このシステムを立ち上げないと見られない環境では、あまり頻繁に見てくれなかったのです。

一方、大阪市の小中学校は後者で、「心の天気」のデータを統合型校務支援システムと連動させました。それにより、アラート機能が使えるようになります。出欠情報や保健室の利用状況、「心の天気」で「雷」がついた場合など、学校ごとにアラートの条件を設定できるようになっています。ですから校務支援システムの画面を開けば、アラートが出て、担任はどの子どもが要注意なのかに気づくことができます。このアラートをもとに、教員が子どもに声をかけるきっかけをつかみ、個に応じた指導につなげることができるのです。そして、指導後の様子も「心の天気」で確認していくことができます。このような指導を続けたところ、子どもたちの教師を信頼する気持ちが高まったというデータがあります。

さらに、管理職は全校の子どもの「心の天気」を見ることができ、アラートも把握できますから、見落としがなくなります。子どもへの見取りがやや弱い先生に対して「この子は『雷』になっているけれど、理由を聞いてみましたか」などと声をかけられますので、子どもの捉えという面で、教師力の向上にもつながっています。

個別最適化の本質とは?

これまでは宿題を出すときに、本当は個々の子どものレベルに合わせて出したほうがいいとわかっていても、教員はクラス全員に同じことをさせてきました。

個別最適化をしようと思ったら、例えば、教員が算数の学習プリントを40段階分作って印刷し、子どもはレベルに応じて順番にやっていく、ということをするしかありませんでした。しかし、個別最適化学習のためのシステムができ、AIが発展したことで、教員が手間暇かけて印刷しなくても、個々の子どもの習熟度に合わせた学習が可能になりました。つまり、今まで教員たちがやりたくてもできなかったことが実現できるようになったのです。

おそらく「こういうシステムが入ったから個別最適化学習をやりましょう」と言っても、協力的でない教員もいると思います。そのような教員には、個別最適化学習は決して新しい発想ではないこと、長年の宿願がやっと実現できるようになったのだと、管理職が話してみてはいかがでしょうか。

私は現在、文部科学省「統合型校務支援システム導入実証研究事業」の委員長を務めており、様々な実証研究事業を見てきました。その経験から言えることは、学校の管理職の「ICTを上手に使わなければ」という意識が先行してしまうと、うまくいかない可能性があるということです。それよりも大事なのは個別最適化の本質を見失わないことです。本質とは、個の実態を捉えて、個別に支援することです。ICTを使うか使わないかよりも、重要なのは本質です。そう考えたとき、個を知るために「心の天気」システムが役に立つはずです。学校でぜひ活用してほしいと願っています。

「心の天気」システムについて、詳細は株式会社EDUCOM（エデュコム）へお問い合わせください。
https://www.educom.co.jp/